

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



GENのワーキングツアーが訪れた霊丘県上北泉村では、伝統芸能でツアーを歓迎してくれた

Contents

第9回会員総会のお知らせ	P 2
汚水浄化、ものすごい効果!	P 3
春のワーキングツアー日誌から	P 4
「黄土高原だより」が本になります!	P 5

2003.5

91

緑の地球ネットワーク 第9回会員総会のお知らせ

イラク戦争につづいてSARSの直撃をうけ、今年のGENは大ピンチです。平時の国際協力には、平和と安全がかかせないものだといまさらながら実感しています。

そんな状況でも、大同では環境林センターでの汚水処理施設の稼働など、新しい進展もできました。緑化協力事業の現状や、活動の問題点について等、会員みんなでコミュニケーションする機会です。どうぞご参加ください。

会員の方には、追って詳しいご案内をお送りします。

【緑の地球ネットワーク 第9回会員総会】

日時：6月14日（土）13時30分～16時30分

記念講演：13時30分～15時10分

『ゆたかに生きるとはどういうことか（仮）』植田助さん（京都精華大学教授）

会員総会：15時20分～16時30分

場所：大阪市立総合生涯学習センター第2研修室（大阪駅前第2ビル6階
TEL. 06-6345-5000 各線「梅田」駅、JR「大阪」駅/東西線「北新地」駅）

【懇親会 & 『明日への環境賞』受賞記念パーティー】

日時：6月14日（土）17時30分～19時30分

場所：大阪弥生会館（TEL. 06-6373-1841、JR「大阪」駅/阪急「梅田」駅徒歩5分）

会費：4,000円

参加申込み：6月10日までにGEN事務所まで

GEN会員以外の方でもご参加いただけます。お気軽にどうぞ！

『明日への環境賞』受賞！

朝日新聞社の第4回「明日への環境賞」を、緑の地球ネットワークが受賞しました。

全国250余りのNGO、市民団体、自治体、企業などの応募・推薦のなかから、次の4団体といっしょに選ばれたものです。新聞発表は4月17日でした。

セイコーエプソン株式会社（長野県）

気候ネットワーク（京都府）

全国合鴨水稲会（岡山県）

高知県高岡郡梶原町

4月23日に朝日新聞東京本社で贈呈式があり、先約で出席できなかった立花吉茂代表に代わって、遠田宏顧問と高見邦雄事務局長が出席し、正賞の賞杯（ガラス造形「水の惑星」富山ガラス造形研究所渋谷良治教授制作）と副賞100万円を受けました。

木製の賞状には「中国の黄土高原で長年、現地の人々と一緒に植林活動を続け、砂漠化防止や農民の暮らしの向上に努めてこられました。その国際貢献における業績をたたえ本賞を贈ります」とあります。

贈呈式では、遠田顧問が「初期には困難と失敗の連続だったけれども、カウンターパートや地元の人々との共同の努力で乗り越えてきました。このような名誉ある賞を受け、多くの会員、支持者と喜びを共有しています」とお

礼の挨拶をしました。

贈呈式とそのあとの祝賀レセプションに、これまで協力して下さった助成団体などの代表、関東地方の世話人、古くからの会員などが招かれて参加しました。ありがとうございました。

北京の日本大使館から 目賀田公使が大同を訪問

4月11日から13日まで、在中国日本大使館の目賀田周一郎公使が大同を訪れ、緑の地球ネットワークの協力プロジェクトと、1滴水もない桑干河をはじめこの地方の環境問題を視察されました。全行程に共産党大同市委員会の梁鳳書副書記が同行し案内しました。

緑の地球ネットワークのプロジェクトのなかでは、アンズ栽培が成功し退耕還林のモデルになっている渾源县呉城郷、マツが伸びはじめた大同県采涼山プロジェクトと「カササギの森」、環境林センターでは汚水浄化装置の通水式に出席し、梁副書記とともにポンプのスイッチを入れてもらいました。聚楽郷では農家と小学校の視察があり、昼食を窯洞の農家でとりました。

地元に着してすずめられているNGOの協力事業に、認識と共感を深めてもらえたと思います。

カウンターパートが 交替

緑の地球ネットワークは、大同における緑化協力を11年あまり続けてきました。そのかんのカウンターパートは大同市青年連合会でしたが、2001年末の青年団の人事異動を契機に、協力関係がしっくりいなくなり、困っていました。

中国共産党大同市委員会とも継続的に話し合いをもった結果、より安定した発展を保障するために、今後は大同市総工会と協力関係を樹立することになりました。

具体的な事業やワーキングツアーの受け入れなどを担当してきた「緑色地球ネットワーク大同事務所」は、武春珍所長以下のメンバーと環境林センターなどの資産を含めて、大同市総工会に移管されました。したがって、実際面においては大きな変化はなく、より良好な環境が保障されると思います。

工会は労働組合のこと、総工会はその連合体で、大同市の各県・区にも組織があり、農村での活動もこれまでどおり実施することができます。

今春は、イラク戦争やSARSの影響でワーキングツアーはGENオリジナルのもの1つだけでしたが、各県の総工会との呼吸もあい、スムーズに活動をすすめることができました。

（高見邦雄）

汚水浄化、ものすごい効果！

水の再利用に新しい可能性が

高見 邦雄 (GEN事務局長)



環境林センターで建設をすすめていた汚水浄化設備が完成し、稼働しはじめました。大旱魃の2001年、センターは井戸水まで汚染され、育苗をはじめ苦境に立たされました。外務省草の根無償資金協力の援助で井戸を掘りましたが、毎年2~3mも水位が下がるところですから、地下水を無神経につかうわけにはいきません。

付近の碓務局住宅からの生活汚水を浄化して灌漑につかうことをあわせて計画しました。大阪産業大学の菅原正孝教授が現地調査のうえで浄化の基本設計をおこない、環境技術研究所が詳細設計にあたってくれました。制御盤は会員の中村文生さんの手作りです。

処理槽は26.5m x 10mで、25mプールほどの大きさ。これで1日に250tの処理が可能です。地元の水道水監視網に処理水の品質検査を依頼したところ、つぎのような結果がでました。()内は中国の水道水の基準です。

COD	6.8mg/L	(3mg/L)
混濁度	10.09 NTU	(3度以下)
色	5度未満	(15度以下)
硝酸塩	0.9mg/L	(20mg/L)
亜硝酸塩	0.055mg/L	(0.15mg/L)
総大腸菌	230個未満/mL	(3個以下)
塩化物	281.2mg/L	(250mg/L)
pH	8.02	(6.5 ~ 8.5)
鉛	0.002mg/L	(0.01mg/L)
砒素	0.003mg/L	(0.05mg/L)
水銀	0.001mg/L未満	(0.001mg/L)

(L=リットル)

最初にデータをみたとき、なにかのまちがいじゃないかと思ったくらいです。処理水のCOD(化学的酸素要求量)は6.8mg/Lは、中国の水道水の基準3.0mg/Lまであと一息。BOD(生物化学的酸素要求量)では1ケタも下のほうに相当します。灌漑用水としてはぜひいたくすぎるくらいで「ペットボトルのビンにいれ、だまって食堂におけば、絶対に誰かが飲む」とセンターの職員がいます。簡単な再処理で飲用可能どころまでいでしょう。水質を少し犠牲にすれば、処理量を増やすことも可能です。

この施設の特徴は、高度処理に土壌浄化法を採用したことです。土壌のなかにはたくさんの微生物が生息し、その分解力を生かせば、良好な水質がえられることは広く知られています。しかし従来のやり方では効率が悪く、大量処理のためには広大な面積が必要でした。今回採用したのは、透水層(軽石)と土壌ブロックをレンガ積みのように多段に重ねる方式。それによって、本来の水質のよさと高効率を同時に実現したのです。

日本では国立公園のトイレなどで、水の循環利用につかわれはじめた最新の技術です。この規模のものは「世界でもはじめてでしょう」というのが設計者の話。成功してほんとうによかった。運転をつづけるうちに微生物の働きが活発になり、これから水温も上がるので、水質はもっとよくなる可能性があります。

苦労したのは、土壌ブロックの中味です。黄土は透水性がきわめて悪く、また水にもろくて、この目的には最悪です。設計にあたった技術者が黄土を一目みて、「えっ、こんな土しかないんですか」とあきれかえったくらい。しかしこの



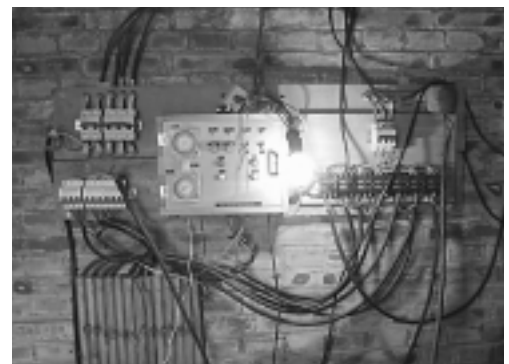
「食堂に置いておけば誰かが飲む」(左が原水) 地方の土はみな黄土です。

植生調査のときも、つねに土を探していました。ついにはトンネル工事の現場からも土を運んだんです。水の浄化に適当な土は、植物の生育にも最適な土。これまでの経験の蓄積があったからこそ可能になったと思います。

制御盤を除いて資材はすべて現地のもので使いました。建設費も400万円ほど。構造は簡単で、運転にも特別の技術は不要です。たとえ故障しても、現地ですぐに対応できます。

4月13日、日本大使館の目賀田周一郎公使を迎えて、通水式をもちました。地元のテレビ、新聞で報道されましたが、口コミの効果はそれ以上で、試運転がはじまってから毎日数組の見学者があり、「すぐにでも自分のところでつくりたい」という声があります。

大同の水問題はほんとうに深刻です。そして大同は北京の水源です。水のリサイクル利用に道を開ければ、緑化以上に意味のある環境協力になるかもしれません。



GEN会員の中村さんが手づくりした制御盤

春まだあさい大同で木を植え、遊び、考えました

2003 春の黄土高原ワーキングツアー日誌から

3月24日～31日におこなわれた今春唯一の黄土高原ワーキングツアー参加者は29人。イラク攻撃とSARSのあいまをぬって、早春の大同でしっかり木を植えてきました。参加者がツアー中につけた日誌から、ごく一部を抜粋してご紹介します。

【3月25日（火）】

大同は標高1,000m、けっこう寒いとのことで防寒対策をバッチリしてきたが、今年は昨年にくらべ春もおそく、2日前に雪がふったにもかかわらず、今日はすごくあたたかくびっくり。

懸空寺に行く途中の道路がこわれていて、通れないため、回り道をしたおかげで、中国最古の木造建築物の木塔を見学できた。木塔も、懸空寺もともにすばらしい建物で感動しました。また、覺山寺の塔と壁画にも胸をうたれました。覺山寺にて、7本のいぶきの記念植樹に、しっかりと根がつかますように、またりっぱにそだちますようにと祈りながら、スコップで土をかけました。そして、黄土高原が緑いっばいになるように。(生田昌子)

【3月26日（水）】

高見さんと植物園の李園長からのお話をうかがった後、皆で鍬か苗をもって管理所の向かい側の山に行き、稜線のわき斜面に油松、遼東櫟、コノテ柏（側柏）、白樺の4種類の苗を250本ぐらいい植えました。寒風はあまり強すぎて、寒くて鼻水が絶えず垂れながら、作業してとても辛かったです。

土が固くて石だらけなので、30cmの深さを掘るのが、まず一苦労でした。土を掘ったり、苗木を穴に入れて、土で覆ったりして、苗木に日本語と中国語で「精一杯頑張ってはやく大きくなってね！ 来年きつとまた会いにくるよ」と声をかけました。(王蕙懿)

【3月27日（木）】

8:30、学校に集合、そして果樹園に向かい杏子の木を植える。硬い土や石ころ混じりの土を掘る作業はなかなかの重労働で終わるころには握力が無くなっていた。作業終了後、昨年できたばかりの貯水槽を見に行く。この施設のおかげで水の供給がスムーズに行われてありがたかった。この貯水槽の所から見る景色は絶景

だったが、あまりに大きく広く荒れた山々とこの果樹園との自然と人とのギャップを感じた。しかしモデルとなるこの果樹園を大きく広めて小さなことからコツコツとしていき、良い循環を作っていくことが大事だと思った。

(中略) 昼食後、子どもたちや村人との交流。サッカーボールやなわとび、折り紙など出すものすべてに興味を示し本当に楽しそうだった。この子たちを見ていると日本の豊かさと比較して本当の豊かさとは何だろうと考えてしまった。(富樫章)

【3月28日（金）】

私は上北泉村の村長さん宅に泊めてもらったが、イラクの戦争について熱心にテレビを見ていて、熱く語っていた。内容は少しだけ教えてもらったが、戦争はよくない、一般の人が傷つくのはよくないと言っていた。

私は自分が恥ずかしかった。貧しい村の人だとしてどこかで思っていたことが恥ずかしかった。立派に自分の意見をもって、勤勉で働きもので、すごいなあと心にうったえるものがありました。

植林も3日目となり、だいぶ慣れてスムーズにできるようになった。今日は靈丘県から大同県への移動で日程が多少ずれこんで、たくさん植えることができなくて少し残念だった。

カササギの森をそろそろ北京の人に開放して、2泊3日程度で植樹と農村部の現状を見てもらおう企画があるとの



上北泉村で。つぎはここに植えるのかな？

こと。すごくいいことだと思う。

いくら日本人が一生懸命になっても、中国の都市部の人知らん顔では意味がない。やはり自国の人びとの意識が高まり、中国が日本のように環境問題のツケを後々払わなくてよいようになるのが一番だ。中国の秘めている力は果てしない。だからこそ早くに手をうって、次の時代のリーダーとなるにふさわしい国になっていったらいいなあと思います。(秦野瑤子)

【3月29日（土）】

自分自身、初めての本格的なボランティア活動だったわけですが、ただ木を植えればいいのだという漠然とした認識しかありませんでした。

しかし、高見さんや遠田先生のお話を聞いて、このプロジェクトの重要性や大切さを痛感しました。植林作業は、思っていたより重労働で大変でした。作業の場所まで行くだけで体力を使い果たしてしまいました。しかし、自分で植えた木が大きくなるのが、とても楽しみにも思えました。

このワーキングツアーでは、色々な方と出会って、たくさんの楽しいお話ができました。このことが自分にとってなよりの収穫だったとおもいます。

短いあいだでしたが、これからの人生に貴重な体験をさせていただくことができました。また来年も参加したいと思いますので、その節はよろしくお祈りします。

(吉川忠将)



急斜面を上り下りしながらの作業は、けっこう大変



「黄土高原だより」が本になります！

GENの高見事務局長が99年4月からメールで発信しつづけている「黄土高原だより」が本になります。これまで発表したものに全面的に手をいれたうえ、橋本紘二さんの写真もたくさん入りました。中国内陸の農村部の現状、NGOによる草の根国際協力の実情などが率直に書かれています。5月21日発売予定です。

『ぼくらの村にアンズが実った - 中国・植林プロジェクトの10年』高見邦雄著 / 日本経済新聞社 / 1,600円 (税別)

お近くの書店でおもてめください。GEN事務所でも取り扱います (1,600円 + 送料310円)。FAX、e-mailでお申し込みください。

メールマガジン『黄土高原だより』(“melma!”で発行)は、GENのウェブサイトから購読申込みができます (<http://member.nifty.ne.jp/gentree>から、黄土高原だよりのページへ)

* * * * *

また、世界水フォーラムを機に企画されたつぎの2冊の水関係の本にも、高見事務局長がそれぞれ1章を執筆しています。

『水と暮らしの環境文化 - 京都から世界へつなぐ』榎田勲・嘉田由紀子編 / 昭和堂 / 2,100円 (税別)

『水をめぐる人と自然 - 日本と世界の現場から』嘉田由紀子編 / 有斐閣 / 2,100円 (税別)

お近くの書店でおもてめください。

* * * * *

ここしばらくの間にGENに届いた、環境や植物に関する本を紹介し、興味深い本、考えさせられそうな本、参考になりそうな本、いろいろです。お近くの書店でおもてめください。

“シリーズ 地球と人間の環境を考える” 日本評論社 / 各1,600円 (税別)

『1 地球温暖化』伊藤公紀著

『2 ダイオキシシン』渡辺正・林俊郎著

『3 酸性雨』畠山史郎著

以下、環境ホルモン、エネルギー、資源・リサイクルと続刊予定です。

『循環型社会を創る 技術・経済・政策の展望』エントロピー学会編 / 藤原書店 / 2,400円 (税別)

ゴミリサイクルといった身近な話題から、法律、経済、企業の取り組みまではひろく論じられています。

『砂漠化と戦う植物たち - がんばる低

木』徳岡正三著 / 研成社 / 1,600円 (税別)

中国の砂漠化地域(沙地)での緑化は、どのような考えのもとにどのようにすすめるべきなのか、そのなかで低木の果たす役割とは。GENの協力にもつづける議論が展開されています。

関東ブランチから 例会のお知らせ

【6月度】

「水をめぐる中国の歴史 - 沙漠はいつから広がったのか? -」

日時: 6月7日(土) 15時~18時

場所: 立教大学池袋キャンパス5号館1階会議室

講師: 村松弘一(学習院大学・東洋文化研究所・助手)

村松さんの専門は中国環境史。3月まで中国・西安に留学していました。

現地感覚と専門研究に基づいたお話が聞けるものと思います。

【7月度】

「NGO・NPOをめぐる最新動向(仮)」

日時: 7月12日(土) 15時~18時

場所: 立教大学池袋キャンパス5号館1階会議室

講師: 工藤寛之(GEN関東ブランチ立ち上げメンバーの1人)

問合せ: 上田信 (FAX. 03-3985-4790, e-mail: ueda@rikkyo.ac.jp)

2003 夏の黄土高原ワーキングツアー 募集延期のお知らせ

連日マスコミで報道されているように、中国ではSARS(重症急性呼吸器症候群)が深刻な状況です。GENのワーキングツアーの目的地・大同(山西省) 経由地・北京ともに、伝播確認地域(WHOによる)であり、また、外務省は「渡航の是非を検討してください(不要不急の渡航は延期をおすすめします)」という危険情報を出しています(5月8日現在)。

このような状況下で夏のツアーの募集をはじめるとは不確定要素が多すぎるので、募集開始を延期します。

6月はじめごろまでには、実施するかどうか決定するので、参加をお考えの方は、あらかじめGEN事務所ま

でご連絡ください。なお、実施する場合は下記の要領でおこないます。

日程: 8月1日(金)~8日(金)

費用: 一般 = 195,000円、学生 = 185,000円(国際航空運賃、中国国内での交通費/食費/宿泊費、ビザ取得費用、GEN年会費含む) 中国国際航空利用 関西国際空港発着 成田発着便利用の場合、1万円(航空運賃の差額)高くなります

定員: 30人(申込み時にパスポートを所持している人に限ります)

参加申し込みが10人に満たない場合は中止します。

申込み締切: 6月24日(定員に達し次第締め切ります)

植物を育てる (22)



立花 吉茂 (GEN代表・花園大学客員教授)

モチノキ科植物の種子発芽

モチノキ科に属する植物は日本に15~16種野生している。そのうち10種が常緑で残りが落葉樹である。常緑の種類は、西日本の照葉樹林を構成する重要なメンバーで、落葉樹とともに庭木としてしばしば屋敷内に植えらる。これらは、漿果(液果)を結び、小鳥たちは好んで食べ、その糞から発芽して繁殖する。しかし、どの木にも果実が実るわけではない。モチノキ属の植物は雄木と雌木に分かれているからである。その性を調べてみると、ナミノキでは雌3に対して雄1の割合であった。これらの種子を蒔いてみたが翌春に発芽したのはイヌツゲと落葉性種類だけで、他の種類は1年たっても発芽しなかった。それで果肉の影響や乾燥、湿り、変温などの発芽条件をいろいろ変えてみたがだめだった。

2年たったら発芽した

3年計画で12種類の発芽実験をおこなった結果、翌春生えるものと2年後に生えるものがあることがわかった(図)。すなわち、翌春発芽したものは、イヌツゲ、シマイヌツゲおよびウメモドキ、フウリンウメモドキの4種で、他の種類は翌々年になって高率で発芽

した。このような性質の種子は一見成熟した果実のように見えるが、実はまだ未熟であって発芽能力がなく、親木から離れて後に成熟して発芽能力をもつに至るものであって、これを後熟発芽性種子とよぶ。いままでに野生植物の種子発芽の特徴として、硬実性種子、休眠性種子、硬実・休眠性種子の3型あることを紹介してきたが、

このグループをくわえて、後熟性種子、と4型にまとめることができる。

亜熱帯植物か?

その後、沖縄で取ってきたクロガネモチやモチノキが、翌春に発芽することがわかった。これは、冬が暖かいので、開花後1年間も親木に着いていて後熟の必要がないからと考えられる。もともとこの仲間は亜熱帯に分布して地球の暖期に北上して内地に分布し、寒さに適応したものの、種子の成熟にまでは進化していないのかもしれない。

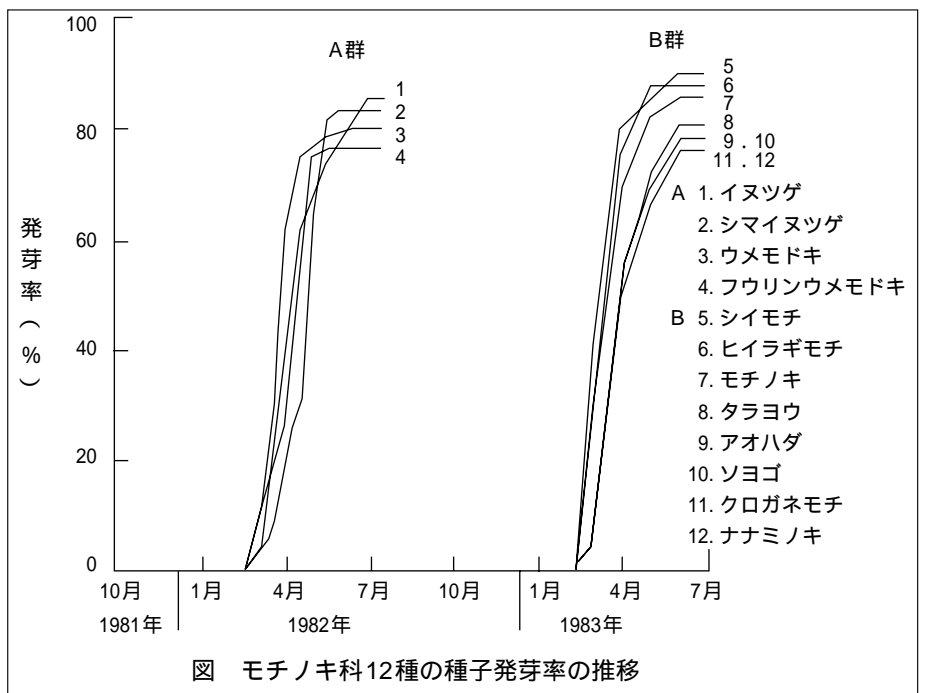


図 モチノキ科12種の種子発芽率の推移

『みどりの感謝祭』参加報告

初夏の強い日差しがまぶしかった4月29日(火)、みどりの日にふさわしく、新緑の木々が美しい東京日比谷公園でおこなわれた「緑の感謝祭」に参加しました。林野庁主催のこの催しに緑の地球ネットワーク関東ランチが参加したのは、昨年に引きつづき2回目です。10名程のメンバーがPR活動や絵はがきなどの販売をしました。陽気にさそわれてたくさんの来場者がありました。

各地の物産や特産品、農産物の販売ブースが並ぶなかで、写真展示中心の

GENのブースは地味な存在でしたが、迫力ある黄土高原の写真やパネルに見える人や熱心に中国の話をする人たちの姿が見られました。今回の出展にあわせて、英語と中国語版の説明書きも準備しました。今後活用できそうです。

中国雑貨ブームの影響か、切り絵は思いのほか人気で1万3千円程度の売り上げがありました。安くて、ちょっと珍しい販売グッズの開拓が必要だと思いました。

今年は団体PRのステージにも参加しました。関東ランチの宝もの、

「黄土高原物語」の紙芝居を披露し子どもたちをはじめたくさんの方たちの関心を集めました。

紙芝居は子どもたちだけでなく大人にも好評で、わかりやすいので続編や別のバージョンを作っていきたいと思えます。参加のみなさん暑い中お疲れさまでした。(宮下利江)



黄土高原史話 〈13〉

華北に象がいた頃

谷口 義介 (摂南大学教授)

適度に小さな地図がよいでしょう、中国の領域を黒く塗りつぶしてみると、雄鶏の形が浮び上ります。東北地方が頭で、トサカもついている。山東半島が手羽、西方の新疆ウイグル自治区が尻尾で、台湾と海南島が2本の足。首都の北京は、ちょうど喉元あたりか。

しかし形は雄鶏でも、中国はやはり巨象というべし。

ロシア、カナダに次ぐ広大な面積(日本の26倍) 複雑多様な自然的条件、今や13億を越す人口、約90%を占める漢族のほか55(57?)の少数民族(90年時点で7万4934人の未識別民族もいるとか)。

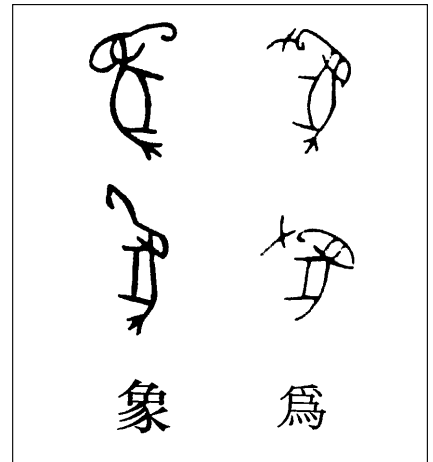
「群盲 象を撫ず[評す]」の愚は避け、以下、象そのものについて。

B.C.121年のこと、南越国(広東・広西)から前漢の武帝のもとへ、能言鳥(オウム)と共に馴象(飼い馴らした象)が献上。別の文献に「巨象・獅子・猛犬・大雀は、外圍に食(やしな)

わる」と見えますから、南方の珍奇な貢上品として、動物園で飼われたのでしょうか。

これより前の春秋時代、B.C.506年、楚王は象の尻尾に火の束をくくりつけ、呉軍に向けて放たせた、と。あまり効果はなかったようですが、この戦法が可能だったのは、楚の地(湖北省)に象が生息、ハンニバルの象部隊には及ばぬものの、象使いもいたのでしょうか。

さらに遡って殷代には、土木工事にこき使われていたらしい。図にあるごとく、「爲」の甲骨文は象の上に手を加える形で、象を使役するという会意の字。「王は我が家(廟)を爲らんか」とトする例などがあって、廟屋を作るような造営には象を使役しました。殷墟からは陪葬された象の骨も出土、死後も労役が期待されていたことを窺わせます。また卜辞には、殷王が狩りを行なうにあたって、「象を獲んか」と占っている例がいくつかあります。し



かして殷王の狩猟は王都からさほど遠くない範囲でしょうから、殷代、河南省あたりまで野生の象がいたとみてよいのでは?

つまり象の生息地は、殷代の河南省から春秋期の湖北省へ、さらに前漢の広東・広西へと次第に縮まってゆき、それに比例して華北では奇獣として珍重されるようになったわけ。

華北から嶺南への象の退却は、そのまま受難の歴史でしょうが、中国北部における気候の変動をも示しているようです。

関東ブランチ講演会 水環境の Think globally, act locally 報告

松永 光平 (関東ブランチ)

4月19日、関東ブランチの4月の月例会では、東京大学助手の安形康さんを迎えて「水環境の Think globally, act locally」と題する講演会を開催した。総勢22名の参加者があり、質疑応答も活発な熱い1日となった。

講師の安形康さんは空・陸・海をめぐる水の動きを追いつづけてきた水文学の専門家で、グローバルな水環境の変化に関する最新の研究状況とその課題、ローカルな水環境との接し方についてのお話があった。

まずグローバルな気候変動について。21世紀の100年間で全体平均気温がおよそ1度から5度上昇するという。一方、全球平均降水量は増加し、黄土高原でもおよそ年40mmの降水量増加が見込まれている。気候変動と人口増加

により現在深刻な地域でますます水問題が深刻化する傾向があるなか、黄土高原をはじめとする黄河流域では、降水量が増加して水ストレスが若干軽くなる可能性があるとのこと。ただし、大同でみられる雨季のズレが農業生産に及ぼす悪影響について考慮されていないことに注意する必要があるだろう。

次に天と地との関係。雨は地より湧くというが、緑化は降水量の増加に結びつくのだろうか? タイにおける最新の研究結果では、「場合による」という。雨の出所が海でなく陸のみで規定されているなら、緑の影響が認められるとのこと。黄土高原ではどうだろうか? ちなみに森林のローカルな水源涵養機能ははまだ不明なので、黄土高原で裸地から森林への過程で流量が

どのように変化するかを長期的に観測してはどうかとのアイデアが出された。

ローカルなアクションについては、趣味と研究を兼ねた湧泉のお話。富士山・鳥海山では人里近い湧泉だけに祠がある。ところが、八ヶ岳では人里離れた山奥にも祠がある。実は、前者は湧き水が豊富、後者は乏しいという違いがある。自然環境と人々の生活との結びつきを認識させるこの実例をもとに、安形さんは、アドバイスとして、現場を歩くこと、マスコミによる報道を鵜呑みにするのではなく、正しい知識を身につけること、を強調された。

以上の講演を踏まえ、現場にでられるGENのなによりの強みを生かして、大同において、関東ブランチからのツアー参加者による簡単な環境調査を開始、長期的に継続していくことが提案された。



環境を考える府民のつどい

大阪環境賞表彰式・グリーン購入シブシブ

日時：6月15日（日）13時～17時
（開場12時）

場所：大阪国際交流センター（大阪市天王寺区上本町8-2-6地下鉄谷町線 / 千日前線「谷町9丁目」駅徒歩10分、近鉄「上本町」駅徒歩5分）

内容

おおさか環境賞授賞式（13時～）
基調講演「私のグリーン購入」市田ひろみ氏（14時20分～）
パネルディスカッション「グリーン購入が創る持続可能な社会（15時30分～）郡薫孝氏（コーディネーター）、天野正彦氏、河野裕史氏、田口整司氏、藤浪晴子氏、前田けい子氏（パネリスト）
入場無料 定員1000名（先着順）
申込み・問合せ：大阪府循環型社会推進室環境活動推進グループ（〒540-8570 大阪市中央区大手前2丁目 TEL. 06-6941-0351（内線3885）

* 当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。

* 当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の未です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

FAX. 06-6944-6711 e-mail :
junkansuishin-g10@sbox.pref.osaka.jp)
申込み方法：氏名（ふりがな）、団体名、所属・役職、住所、TEL、FAX、eメールを明記して上記まで。
環境配慮型商品等展示会同時開催

者同伴の場合は16歳未満も可）
集合・解散：電車利用者はJR福知山線「市島」駅。車利用者は現地。
申込み方法：名前、住所、電話、性別、年齢を明記して下記まで。
主催・問合せ・申込み：（財）神戸学生青年センター（〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1、TEL. 078-851-2760 FAX. 078-821-5878 e-mail : green-w@po.hyogo-iic.ne.jp)

森林講座

- 森を語れる人になろう -

都市生活と乖離してしまった森林を身近なものにし、私たちの暮らしと森林の関係について考えてみましょう。林業体験、森の学習会「日本の森林が荒れる理由」、森の観察会など。

日時：6月21日（土）、22日（日）
21日9時30分オリエンテーション開始、22日13時解散

場所：エルムいちじま（兵庫県氷上郡市島町与戸字長尾52-1、TEL. 0795-85-2501）

参加費：8,400円（1泊3食、ボランティア保険、消費税）

募集人数：15名（16歳以上。保護

編集後記

またまたいまさらながらの読書です。「ちょっとピンボケ」(ロバート・キャパ)。第2次世界大戦のアフリカ、ヨーロッパ戦線で、戦争の現実をとらえようとつづけた報道写真家の手記を読みながら、彼がいま生きていたなら、9.11以降のアメリカの武力行使をどのようにとらえるだろうと考えていました。血を流す兵士たちのかわりに、爆弾投下のボタンを押す兵士の姿を、その爆弾によって傷ついた人びとの姿を、彼は撮影したのでしょうか。（東川）